

言葉が出ない世界は宇宙と同じだった。

一人ぼっちで無重力に浮かんでいるような、そんな気分。ときどき私に近寄って来る人がいるけど、すぐにどこかへ去ってしまう。行かないでと叫んでも、私の声はそこに溶けるだけだった。

そんなときに私は彼女と出会った。



昼休みのチャイムが鳴ると同時に彼女はいつも私の所にやって来る。

「すばるーお弁当食べよ！」

暖房のかかった教室で白のカーデイガンを羽織りながら、陽気な声とお弁当箱を持って陽子はいつも空席になる私の前の席に陣取る。毎日のように笑顔を振りまき、彼女は色々な話をしてくれるのだ。

「でね、この少女マンガがおもしろくってさ」

私は陽子の話に頷いたり首を振ったり、携帯電話で文字を打って画面を見せたりする。そうすることによって私は陽子とコミュニケーションを取っていた。女子高生なら誰でも持っているアイテムが私にとってはハンドデの象徴でもある。それでも陽子は私の文字を打つ時間を待ってくれて、何気なく会話を続けてくれるのだ。

「すばるはさ、可愛いんだからもっと笑顔でいないとダメだよ」

ときどき、陽子がどうして私なんかと友達になってくれたのか不思議に思うことがある。声の出せない私をめんどくさがったり、他の人みたいに飽きてどこかに行ってしまうこともない。出会って一年以上も経つのに、どうして私のそばにいてくれるのか、未だにそれだけが怖くて聞けなかった。

携帯で打った文字を見せる。

『私、全然可爱不いよ』

「バカねあんた。自分がどれほど可愛いかわ覚してないの？ どっかのモデルみたいに整った顔してるくせに」

自分ではそんなこと一度も思ったことはないけど、陽子はいつもそう言ってくれる。

「私が思うに、すばるの一番綺麗などこって目のよね。あんたの名前と一緒に、プレアデスみたいにキラキラしてて、すごく羨ましい」

『キラキラなんてしてないよ』

両親が宇宙好きだったから『すばる』なんて名前にしたみたいだけど、私はもつと普通の名前が良かった。

すると唐突に陽子が言った。

「すばるはさ、彼氏とか興味ないの？」

恋バナだった。

これも陽子が好きな話題で、よくこうやって私と二人きりのときに切り出してくる。

『私はいいよ。喋れないし』

「そんなの関係ないでしょー」

『関係あるって。喋れない女の子なんて男子からしたら、めんどくさいじゃん。私だってそう思う』

この学校に転校してくる前に私は交通事故に遭った。父が運転する車の後部座席に乗っていたところを後ろからトラックに追突され、その衝撃で頭を強く打ち、気がつけば病院にいた。

そして後遺症として残ったのが言語障害だった。

喋ろうとしても上手く言葉にできず変な声になってしまう。最初はリハビリも頑張ったけど結局挫折して、携帯電話を使って相手に意思を伝える方法を私は選んだ。

そんな私に最初はみんなも優しく接してくれた。けど、喋れないということがめんどくさいとわかると、みんなは早々と私の周りから消えた。きっと物珍しい転校生としてしか見てくれてなかったのだと思う。今まで私に話しかけてくれたのは同情と偽善でしかなかった。

その中で、ずっと私に話しかけてくれたのは陽子だけだった。みんなが私をめんどくさがるって避け始めても、陽子だけは変わらずに接してくれた。どうしてなのかわからない。本当に友達だと思ってくれているのかどうかも、私は今でも怖くて聞けないでいる。

「ちよつと聞いてんのー」

目の前で陽子が不機嫌そうな顔をしていた。

『あ、ごめん。何だっけ』

「いつまでも喋れないからっていじけてるから、私以外に友達できないのよって言うてるのー」

みんなと違ってズバズバと本音を言うところも、陽子の良いところだった。だけど本当にそのとおりで、私は今までずっといじけたまま自分から友達を作ろうと思ったことはなかった。直そうと思ったことはあったけど、そんな勇気は湧いて来ない。だから、友達の多い陽子が羨ましかったのだと思う。

『いいもん、別に』

「ほらまたそうやってほっぺ膨らますんだから」

『膨らましてないもん』

「膨らましてるわよ」

そのまま陽子を無視して私はお弁当に残っていた最後の卵焼きを口に頬張った。お母さんが毎朝作ってくれるものは全部おいしかった。

「私さー、実は言ってなかったことあんのよねー」

お弁当の蓋を閉じた後に陽子が言った。

『何？』

「うーん、誰にも言っちゃダメだよ」

『他に言う相手いないし』

「それもそうだった。あのね、実は今日私の下駄箱にラブレター一つーもんが入ってたの」  
思わず吹き出しそうになった。

『ラブレター？』

「何よその笑いは」

『だって陽子にラブレター出すってよっぽど勇気があるとしたか思えないもん』

陽子は気が強い女の子でもっばら有名だった。顔はすごく可愛いけど、男子にはすごく恐れられている存在でもある。そんな彼女にラブレターを出すなんて陽子の性格を知らないか、よほど陽子に惚れているかのどちらかだ。

「あのねすばる、私だって年頃の女子高生なんだから彼氏くらい欲しいとは思ってるの」

『ごめんごめん。いいと思うよ。それで、その手紙の主は誰なの？』

「それがさー、知らない名前なのよね」

『じゃあクラスメイトじゃないってことね』

同じクラスの男子は陽子の気の強い性格にすっかり参っている状態だ。そんな中で陽子が告白しようなんて人間はまずいないだろう。

「私にラブレターを出すなんて、この手紙の主もなかなかお目が高いわね」

『自分で言うことじゃないと思う』

「ほら、私って可愛いしさ」

『だから自分で言うことじゃないよ。それで、手紙の内容はどんなのだったの？』

すると陽子は自信満々に胸を張り、

「一目惚れしたので今日の放課後に屋上に来てくれ、みたいな感じの内容」

『陽子の性格を知らないなら仕方ないか』

その言葉に彼女は唇を尖らした。

「なによそれ。まるで私が性格ブスみたいな言い方じゃない？」

『気が強いってこと。でもそんな女の子が好きな男の人もいるかもしれないよ』

「ふーん。じゃ、もし手紙の相手がイケメンだったら付き合っちゃおうかなー」

——その言葉に一瞬、チクリと胸が痛んだ。

『別にいいんじゃないの。陽子の好きにすれば』

「何でほっぺ膨らましてんのよ」  
『知らない』

お弁当を仕舞って私は頬杖をついた。



「ねえ」

転校してきてから二週間経った日の昼休み。屋上でひっそりとお弁当を食べていると、同じクラスの佐藤陽子が私に話しかけてきた。

「どうしてこんなところでお弁当食べてんの？」

秋の涼しい風が吹き込む屋上で、私は陽に照らされた彼女が神様のように見えた。たぶんみんなから相手にされなくなつて、初めて声をかけてくれたクラスメイトだったからだと思ふ。

私は急いで携帯電話を使って文字を見せる。

『私が教室にいと、みんなが気を使うから』

「意味分かんないんだけど、何で？」

佐藤陽子のことは知っていた。というより、同じ学年なら誰もが知っている有名人だった。容姿端麗でお喋りで、私みたいな一時的な人気者じゃなく、真正銘のクラスの人気者。私なんか気安く近づけるような人ではなかった。

『みんな私のことを相手にしたくないみたいだし、いても迷惑になるだけだし』

「だから何だよ」

彼女は本気でわかっていないような目をしていた。答えは決まっているのに、どうして彼女がそのような目をするのか理解できなかった。

『だって私、喋れないから』

携帯電話を持つ手が震えていた。

そんなわかりきった真実は私を確実に追い込んで、やがて砂で固めた心が崩れそうになった。

「——そんなの関係あんの？」

彼女が発した一言が、胸に突き刺さった。でもそれは痛みじゃなくて、少し不思議な感触だった。

『だって、喋れないってめんどくさいでしょ。会話もスムーズにできないし、みんなのノリに合わせられないし』

最初はみんなも私のペースに合わせて喋ってくれていた。けど、やっぱりみんなは気を使うのが疲れてきて、私の周りから消えた。そうなるのはだいたいわかっていただけ、それでも辛かった。

だけど、彼女は怒ったような顔で言った。

「結論を言うかね、そんな奴らを自分に引き寄せたあんたが悪い！」

どうして私が怒られたのか、理解できなかった。

『意味分かんない』

「この際だから教えてあげる。あんたみたいなめちゃくちや可愛くて、なおかつ喋れない転校生なんて、そりゃみんな興味津々になって食いつくに決まってるじゃない」

『私、可愛くない』

「はあ？ 自分の可愛さに気づいてないなんてバカじゃないの？ 悔しいけどあんた、私より可愛いわよ。ほんとむかつくくらいにね」

もしかしたら彼女は私をいじめに来たのだろうか。そんなことさえ思わせるくらいに、佐藤陽子という女の子は本音をズバズバと口に出した。

そんな彼女に私は必死に抵抗する。

『でも、喋れないってめんどくさいでしょ。佐藤さんだって、そう思ってるでしょ』

「ええ、めんどくさいわよ。でもね、それは喋れないからじゃない。あんたが喋れないのいいことに、自分の内側を見せてくれないからよ。だから興味本位でしか人が寄ってこないのよ」

この言葉が、私を立ち上がらせた。

必死になって両手で文字を打ち込む。

『佐藤さんみたいな人にはわからないよ！ お喋りで、みんなから慕われてて、人気者で、そんな真逆の人間に私の何がわかるのよ！』

すると、彼女も糸が切れたかのように眉が釣り上がり、目つきがまるで別人になった。

圧倒的な威圧感で私に迫る。

「じゃあ逆に聞くけど、あんたに私の何がわかるっていうの？ みんなから慕われてる？ 人気者？ ふざけんじやないわよ！」

鬼まで逃げ出してしまいそうな彼女の怒号が屋上に響いた。あまりの剣幕に私は後ろに一步下がった。そして彼女は追い込むように言い放つ。

「あんたも、あんたの周りに群がってた連中と一緒にね！ 人の内側を見ようともせずには勝手にこうだから、ああだからと決めつけて。そんなんだからほんとの友達ができないのよ！」

気がつくのと、私はいつのまにか泣いていた。彼女の言い方と顔が怖かったのもある。だけど、一番の理由は、喋れないことを言い訳に使っていた自分に気付かされたことだ。

「ちよ、ちよっと何泣いてんのよ……」

涙が止まらなかった。嗚咽が漏れて、言葉にならない声が私の喉から飛び出していた。嬉しかったのかもしれない。

初めて自分の内側を見ようとしてくれている人がここにいることに。

「あーもう！」

そう言うとなんか彼女は私の頭を撫でてくれた。泣いている自分を見かねたのだと思う。それが嬉しくて、また涙が頬を伝っていた。

「あーその、ごめんね。私も言い過ぎたから、お願いだから泣き止んで」

画面を見ずに、慣れた手つきで私は携帯で文字を打って彼女に見せる。

『私の方こそ、ごめんなさい』

彼女はそれを見て、ため息混じりの笑みを浮かべた。

「うん、あんたは悪くないわ。ほんとと言うとね、私、あんたと喋ってみたかったの。転校してきてからは周りに人がいて話しかけづらかったけど、あんたが何考えてんのか知ってたかった」

『どうして？』

涙を拭きながら彼女に訊ねる。

彼女なら周りに人がいようが関係なく話しかけて来そうだと思った。それに、どうして彼女のような人が、私なんかのことを知りたいと思ってくれたのだろうか。

「なんとなく、じゃダメ？　ほんとの理由を言うのはちよつと恥ずかしいからさ」

何でも本音を言いそうな彼女がそんなことを言ったことに私は驚いた。けど、それでも私のことを知りたいと言ってくれた人は生まれて初めてだった。

『うん』

自然と返事を書いていた。

すると、彼女は満面の笑みになって言った。

「それじゃ、私とほんとの友達になってくれる？　星野すばるさん」

——友達。

その言葉がすごくすごく嬉しかった。

『いいよ、佐藤さん』

「陽子でいいよ」

『じゃあ、私も、すばるでいいよ』

それが陽子と友達になった瞬間だった。



いてもたってもいられなかった。

気がつくとも私は教室を飛び出し、屋上に向かって階段を上っていた。一段ずつ飛ばして、息が切れながらも二階から屋上へ続く扉の前まで来た。

もう告白を受けていたらどうしよう。

もし陽子に彼氏ができていたらどうしよう。

そんなことが頭をよぎって、また孤独になってしまいかもしれない恐怖で押しつぶされ

そうになった。その重圧が扉のノブを回すことを躊躇させる。

ここを開ければ陽子と手紙の主がいる。

そのとき私は何て言えばいいのだろうか。

すでに泣きそうになっている自分がそこにいた。扉のノブを持ったまま立ち尽くしている。開けないといけないのに、手が震えて動き出せないでいる。

けど、このまま何もできずにいるのはもう嫌だった。このままここで何もしなければ、私はまた自分の殻に閉じこもっていた日に戻ってしまう。

——それだけは嫌だった。

「ダメ！」

障害のせいでうまく言葉になっていなかったかもしれない。だけど、私は扉を開けて目一杯の声で叫んだ。もう二度と声が出せなくなってもいいくらいに、喉が壊れてもいいくらいに。

目を開けると、屋上には陽子がいた。

「あんた、何してんの？」

きょとんとした表情で陽子は私を見ていた。周りを見渡しても、屋上には他の人はいなかった。

携帯で文字を打ち、陽子に見せる。

『手紙の人は……？』

「少し前に帰ったわよ。ってあんたさっき、声……出たたよね……？」

『聞こえたの？』

「聞こえたわよ。はっきりと、ダメって」

言葉が短かった分、ちゃんと発音できていたのかもしれない。障害になってから今まで、人前で声を出したことはなかった。

初めて、自分の声が誰かに届いた気がした。

「あーあ、あんたまた泣いてるよ」

そう言われて、初めて自分の頬を伝うものに気がついた。そして、もう止まらなかった。風が頬に触れ、涙は冷たい感触となって流れていった。

「しようがないわね」

そう言うのと陽子は私をそっと抱きしめてくれた。彼女の体はすごく暖かくて心地よかった。いつまでも、ずっと、このままでいたいとさえ思った。

携帯の画面を陽子の顔の横から見せる。

『告白、受けたの……？』

「バカね、受けるわけないでしょ。ちゃんと振ってやったわよ」

『タイプじゃなかったから……？』

「そんなんじゃないわよ。最初から告白なんて受けるつもりなかったし、ただちよつとあ

んたに嫉妬させてやりたかっただけ」

すると陽子はゆっくりと体を離し、私の目を見つめた。改めて見ると、陽子の顔はすごく可愛くて、綺麗な色の肌をしていた。

ため息混じりに、陽子は私の頭を撫でた。

「そういうば最初に話した頃も、あんたここで泣いてたわね。ほんと泣き虫さんなんだか」  
「ら」

『泣かせるのはいつも陽子のくせに』

「そうだっけ？」

『そうだよ』

「ごめん。でもね、そんな泣き虫さんが私は好きなの」

——胸がとくとんと弾んだ。

生まれて初めて、好きという言葉をもらった。

それだけで心がいっぱいだった。

『ほんとに……？』

「嘘じゃないわよ」

その言葉を聞いて、私はやっと聞けずにいた事を切り出せると思った。

『一つだけ、ずっと陽子に聞けなくて怖かったことがあるの……』

「何よ、言ってみなさい」

『あのとき、最初にここで話したとき、どうして私なんかと友達になってくれたの……？』

あの日、陽子は私を知りたいと言った。けど、その理由は教えてくれなかった。それから私はずっと怖くて不安で堪らなかった。

すると陽子は頬を掻きながら、

「……恥ずかしいから一度しか言わないわよ」

『うん』

優しい風が吹いていた。

そして、叫ぶようにして彼女は言い放った。

「あんたのそのプレアデスみたいにキラキラした瞳……独り占めにしたかったの！」

涙が流れ星のように落ちていった。

私は今まで何を心配していたんだろう。そんな必要なかったのに、陽子はちゃんと私を見ていてくれたのに。

『ありがとう陽子……私、すごく嬉しい』

「またあんたは泣いて、もう……」

そう言っって陽子は私の額に優しくキスをした。

「ずっとそばにいてあげるから。泣き止みなさい」

流れ出る涙を必死に拭いながら、私は陽子の顔を見つめて、自分の、精一杯の声で言っ



た。  
「うん！」

終